

# 幼児期における体育指導のあり方に関する一考察

## A study of guidance for physical education in infancy

1 K08B090-2 佐瀬 あいか

指導教員 主査 吉永 武史先生 副査 深見 英一郎先生

### 【本研究の動機・目的】

近年、体育のカリキュラムについていけなかったり、少しの運動でけがをしてしまう子どもがでてしまったりと子どもの運動能力の低下が問題視されている。また、私は大学入学から現在に至り、テニススクールにおいて子ども（4歳～7歳）のレッスンを担当しているが、そのレッスンをを行う中で、実際に子どもの運動能力低下の現状を身にしみて感じる。運動能力低下の原因は、生活環境と遊びの変容に伴って、友だちと外遊びをする機会が減ってしまったことが挙げられる。なぜならば、生活環境と遊びの変容によって運動量と運動の種類が減少し、体力・運動能力の低下が推測されるからである。そして、その生活環境や遊びを簡単に変えることはできない。従って、幼稚園という教育機関でどれだけ補うことができるかが重要であると考えられる。しかし、現状の幼稚園での体育指導は、子どもたちの心身の発達に適していないのではないだろうか。そこで、本研究では幼児期の子どもの運動能力と精神面の発達の実態と適正を探り、幼児期において必要とされる体育指導のあり方を検討する。

### 【方法】

本研究は、幼児体育についての文献をもとに研究を進めていく。また、第2章では、以前幼稚園教諭をしていた方へのインタビュー調査の結果も活用する。

### 【各章の概要】

#### 〈第1章〉 幼児期の特徴と教育のあり方

第1章では、幼児期の子どもの運動機能の発達また精神面の発達にとって、良い体育指導を考えるために、幼児期とはどのような特徴があるかについて明らかにした。また、幼児教育のあり方や幼児体育のあり方を検討した。

幼児期とは身体面及び精神面の発達がとても成長・発達する時期である。そして、3歳～5歳の子どもは神経型の発達が著しいことが特徴的であり、その特徴に適した体育指導を行うことで、子どもの運動能力の向上、また精神面の発達が期待できることが明らかになった。

#### 〈第2章〉 子どもの発達段階に応じた体育のあり方

第2章では、第1節で年少児、第2節で年中児、第3節で年長児の身体面と精神面の特徴を明らかにした。そして、幼児期にあたる年少児・年中児・年長児それぞれの時期の身体面の特徴を明らかにしたところ、幼児期は基本的な運動動作ができるようになる時期であることがわかった。

また、身体運動と感覚運動という2つの運動の種類を取り上げ、幼児期における感覚運動の重要性を第4節で検討した。

#### 〈第3章〉 幼稚園で行われている体育指導

第3章において、第1節では現在幼稚園で行われているヨコミネ式教育などの体育指導の具体的な例を取り上げた。そして第2章で、ヨコミネ式教育などを批判的に検討してみた。

そして、このヨコミネ式などの教育方針のもとで、体育指導を受けると高い確率で子どもの基礎的な運動能力、そして体力が向上する。しかし一方で、精神面の発達においては、ただ課題を与える教育になってしまうことで、子どもの自主性・自発性を養うことができないことも考えられる。

また、第3節においては第2節までを踏まえ、幼稚園と小学校における体育指導それぞれの考え方や連携について検討した。

### 【結章】

近年問題視されている子どもの体力低下はヨコミネ式教育などのカリキュラムによる体育指導を行うことで改善されていくが、精神面の発達を阻害してしまう可能性があることも感じた。

しかしながら、従来の幼稚園で行われているような体育指導では子どもの体力低下の問題が解決されることはない。従って、ヨコミネ式などの教育方針から学ぶ点は多くあると考える。そこで、幼児期の体育指導では、子どもの自主性・自発性を協調した従来の「運動遊び」とヨコミネ式などの基礎的な運動能力の向上が期待できる「体育」という部分をブレンドした体育指導のあり方を検討していく必要があると考える。

